

< 研究ノート >

『基礎看護学実習Ⅱ』における学生が捉えた患者 －学生の相互行為にみる学生行動の特徴

A Study on Interaction Between Client and Student which Characteristics of Student Behavior in Nursing Clinical Practicum

原 華代¹, 根木香代子¹, 大儀律子¹, 新井龍¹, 坂口桃子¹

Hanayo HARA, Kayoko NEGI, Ritsuko OGI, Ryu ARAI, Momoko SAKAGUCHI

¹ 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

【要 旨】

【目的】 学生が認識する患者－学生の相互行為を見出し、相互行為における学生の行動の特徴を明らかにすることである。【方法】 研究協力に同意した学生が実習終了後に提出した課題レポートの「実習で体験した看護場面」の記述を抽出し、学生行動の主観的情報と客観的情報を意味内容の同質性に従い分類した。分類結果を先行研究で明らかにされている「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動 14 概念」と照合し考察した。【結果】 ① 学生が記述した相互行為は 237 エピソードであった。② 相互行為があったとする看護場面の上位は、清潔援助（24 名：46.1%）とバイタルサイン測定（10 名：19.2%）であった。③ 「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動 14 概念」に照合した結果、「情報収集による対象理解と理解深化に向けた情報収集反復」「学習資源活用による技術提供と活用付加による技術提供中断」「対象理解深化に伴う技術提供の個別化とクライアントへの共感」に関する行動を自己と患者との相互行為として多く取り上げていた。【考察】 レポートは看護学実習における学生の複雑な行動概念の理解の一助とできること、及び、患者－学生の相互行為における学生の行動の特徴は、「同一性拡散につながる可能性」「インシデントにつながる可能性」「同一性の確立につながる可能性」が示唆された。

Key Words : 相互行為 看護学実習 学生の行動

interaction, nursing clinical practicum, student behavior

1. はじめに

A 大学看護学科の『基礎看護学実習Ⅱ』は、5つの達成目標のもとに2年次後期に開講(2単位90時間)される。中でも「受け持ち患者の看護上の問題に対して看護過程を用いて解決する方法の基本を理解することができる」、「指導者の指導の下で既習の基礎看護技術を受け持ち患者に適切に実践することができる」の2つの目標は患者や看護職者と人間関係を形成させながら実践することで到達される目標である。

青年期に該当する学生の多くは核家族の中で育ち、小児期や老年期にある家族との生活経験が乏しく人間の誕生や死を身近に体験した者も少ない。このような状況を看護人材の危機と判断した厚生労働省は、平成19年に看護基礎教育の充実に関する検討会¹⁾を通じて「看護学生の基本的な生活能力や常識、学力が変化してきていると同時に、コミュニケーション能力が不足している傾向がある。そのため看護基礎教育では専門分野の学習を深める他、職業に必要な倫理観や責任感、豊かな人間性や人権を尊重する意識を育成していく必要がある」とし、新たな看護基礎教育の課題を示した。学生が人間関係を構築させる力をいかに獲得していくのか、また、その過程を指導する効果的な方法を模索し検討することは、看護学教育にとって重要課題である。

こうした特性を有する現代の青年期の学生が、『基礎看護学実習Ⅱ』で初めて1人の患者を受け持つ。その時、患者への関わりは一方方向ではなく、互いに影響を及ぼす。学生がどのような場面を相互行為と捉え、学生のとる行動にはどのような特徴があるかを解明すれば、学生と教員が実習目標達成という同じ方向に向かって学習活動を進めるうえで、活用可能で有益な基礎資料が得られると考えられる。看護学教育研究の領域では、実習に関

連する数多くの研究が報告されており、先行研究を概観すると、学生を対象とした研究は看護学教育研究全体の7割以上²⁾である。その中で患者－学生間相互行為に関連した研究には、「クライアントとの相互行為が学生の円滑な学習活動を阻害する要因となる一方、促進する要因ともなる」³⁾、との報告や、「学生は特定の臨床状況において、患者、家族、その他の医療専門職とかかわった時に、かかわりのスキルを最も強力に学ぶものである。そこで学生たちは調整された知覚力と賢明な臨床アセスメント能力を発達させていく」⁴⁾する報告がある。阿部ら(2009)の研究³⁾では、看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動の分析から14の構成概念を明らかにするなど、看護学実習における患者－学生間相互行為に関する研究は累積されつつある。

本研究では、看護学生として初めて受け持ち患者と相互行為を展開する看護場面に着目し、学生が認識する自己と患者との相互行為を見出し、相互行為における学生の行動の特徴を明確化しようとするものである。加えて、実習終了後のレポート内容を先行研究の「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する際の学生行動14概念」²⁾と比較検討し考察を試みる。

2. 研究目的

本研究の目的は、学生が認識する患者－学生の相互行為を見出し、相互行為における学生の行動の特徴を明らかにすることである。

2.1. 用語の定義

相互行為²⁾とは、人間と人間のあいだの知覚とコミュニケーションのプロセスである。また、目標を目指す言語的もしくは非言語的行動で示され、直接に観察できる行動である。

行動²⁾とは、身ぶりや発語など言語的・非言語的に人間が示す振る舞いである。外部からの観察が可能であり、意識的なものと無意識的なものの両者を含む。また、行動は人間の知覚から生じ、知覚の影響を受ける。

同一性の確立・同一性の拡散⁵⁾とは、エリクソン（1902-1994）の同一性理論に基づく概念である。エリクソンは、健康なパーソナリティの発達と危機のなかで、青年期の発達課題を「自我同一性（アイデンティティ）」とし、社会的な危機を「自我同一性の拡散」とした。自我同一性の危機は青年期に自我確立の問題として現れることが多い。

2.2. 実習の概要

『基礎看護学実習Ⅱ』の目標は①受け持ち患者の入院生活と患者を取り巻く望ましい環境について理解できる②受け持ち患者の看護上の問題に対して、「看護過程」を用いて解決する方法の基本を理解することができる③指導者の指導の下で、既習の基礎看護技術を受け持ち患者に適切に実践することができる④患者を中心とした医療チームの連携の必要性を理解し、チームにおける看護の機能と役割について述べることができる⑤看護を学ぶ学生として自ら課題を持ち、志向する看護専門職としての望ましい態度の涵養を図ることができる、の5つである。

学生のレディネスは、2学年後期最終段階にあり、基礎看護学に配当された必修科目を全て修了した状態である。実習方法は、臨地実習に赴き1名の受け持ち患者を通して看護の基本を学ぶ。

3. 研究方法

3.1. 研究デザイン

内容分析研究

3.2. 研究対象者および研究データ

研究対象者は、平成X年度『基礎看護学実習Ⅱ』履修学生を研究対象者とし、研究協力に同意した学生が当該実習終了後に提出した課題レポート「実習で体験した看護場面における自己と患者との相互作用」をデータベースとした。

3.3. データ収集の手順

平成X年度『基礎看護学実習Ⅱ』を実施した学生88名に研究協力を依頼した。研究対象者への研究目的・方法について口頭と書面による説明を行った。

3.4. 本研究の信頼性

本研究の信頼性確保のため、内容分析を用いた研究経験をもつ研究者からスーパーバイズを受け、解釈や分類に偏りがいないか共同研究者間で検討した。

3.5. 倫理的配慮

対象学生に対し『研究の目的、調査の概要、協力の有無は自由意思によるものであり、協力しなくても不利益はなく、今後の成績にも一切関係ないことを説明した。データとなる「課題レポート」は、氏名・学籍番号を削除して使用し、本研究目的以外に使用しないこと、収集したデータは鍵のかかる場所に保管し、分析後5年間厳重に保管の上、シュレッダーにより粉砕することを説明した。課題レポートと研究同意書の提出には、学生の意思決定に影響を与えないよう教員不在の場所に提出ボックスを設けた。なお、以上の倫理的配慮は常葉大学倫理審査委員会の承認を得た。（研静18-2）

4. 分析方法

分析方法には、「Berelson, B. の方法論を参考にした看護学教育における内容分析」²⁾⁶⁾

を適用した。まず、学生が「実習で体験した看護場面」をどのように捉えているか明確にするために、取り上げられている看護場面の抽出を行う。次に文脈から一連の相互行為を構成する意味ある文脈の区切りを1現象とする。抽出された「看護場面における自己と患者との相互行為」における現象をデータベースとし分析した。

4.1. 実習で体験した看護場面の記述の抽出

「Berelson, B.の方法論を参考にした看護学教育における内容分析」に基づき、実習で体験した看護場面を抽出した。データの多様性に惑わされず一貫性を維持するために、「学生は、看護学実習Ⅱにおいて、何を“体験した看護場面”と捉えているか」との問いを設定した。また、問いに対する回答文は「学生は、実習中（ ）という看護場面に直面している」と設定した。

4.2. 看護場面における自己と患者との相互行為における学生の行動の分析

抽出された看護場面を記述する文脈から、学生行動の主観的情報と客観的情報を意味内容の同質性に従い分類し、先行研究²⁾で明らかにされている「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動14概念」と照合した。これにより、平成X年度『基礎看護学実習Ⅱ』履修学生における自己と患者との相互行為を展開する学生の行動の傾向を分析した。

5. 結果

88名中、同意の得られた53名(60.2%)のレポートを分析データとした。

5.1. 実習で体験した看護場面の結果

学生が取り上げた「実習で体験した看護場面」の記述結果(表1)は、清拭12名、バ

イタルサインの測定10名、コミュニケーション7名、シャワー浴介助5名、足浴3名、看護師行動の観察、リハビリ同行3名、環境整備・全身観察・陰部洗浄各2名、検査に同行・多職種連携・食事の見守り・教育指導各1名の14種類であった。清潔援助である、清拭・シャワー浴介助・足浴・環境整備・陰部洗浄の看護場面を取り上げた学生は24名(46.1%)と約半数を占めた。

表1 実習で体験した看護場面の記述結果

n = 53

看護場面	記録単位数(%)
清拭	12(23.1%)
バイタルサイン測定	10(19.2%)
コミュニケーション	7(13.5%)
シャワー浴介助	5(9.6%)
足浴	3(5.8%)
看護師行動の観察	3(5.8%)
リハビリ同行	3(5.8%)
環境整備	2(3.8%)
全身観察	2(3.8%)
おむつ交換・陰部洗浄	2(3.8%)
検査に同行	1(1.9%)
多職種連携	1(1.9%)
食事の見守り	1(1.9%)
教育指導	1(1.9%)
記録単位数総数	53(100.0%)

5.2. 自己と患者との相互行為における学生の行動の結果

相互行為を記述する文脈を抽出した結果237現象が示された。記述内容の一部抜粋を(表2)に示す。237現象を阿部ら²⁾により先行研究で示されている「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動14概念」に照合し分類した結果を図1に表す。14概念に該当しない内容が抽出されたため、その他とした。以下に概念の内容と件数を示す。

第1概念:「許諾獲得によるクライアント個人空間への侵入と侵入好機獲得に向けた待機」6件

第2概念：「情報収集による対象理解と理解深化に向けた情報収集反復」51件

第3概念：「対象理解深化に伴う技術提供の個別化とクライアントへの共感」43件

第4概念：「クライアント承諾獲得による技術提供とプライバシー配慮による技術提供機会喪失」11件

第5概念：「学習資源活用による技術提供と活用付加による技術提供中断」46件

第6概念：「技術提供不適切さの修正と修正不可による技術提供中断・強行」18件

第7概念：「技術提供円滑化に向けた協力獲得と未獲得による技術提供不可」3件

第8概念：「技術の未熟さ自覚によるクライアントへの苦痛惹起懸念と懸念払拭」8件

第9概念：「指導者演示の模倣による技術提供と指導者技術提供補助に向けた役割の負担」22件

第10概念：「反復学習による技術提供迅速化と技術提供迅速化に向けた原則からの逸脱」2件

第11概念：「クライアント要求への応諾と棄却」5件

第12概念：「失敗反復によるクライアントからの疑念容認と疑念打破に向けた失敗の否定」0件

第13概念：「クライアント行動変化解釈による関係悪化察知と黙殺」1件

第14概念：「関係形成確信によるクライアントへの心情開示と時間共有」6件

その他、14概念に当てはまらなかった現象が15件抽出された。

6. 考察

6.1. 実習で体験した看護場面

学生が取り上げた看護場面は、清潔援助とバイタルサイン測定を記述する学生が多かった（表1）。清潔援助には、対象の清潔習慣を支える、身体の観察、コミュニケーションを深めるなどの看護の役割⁷⁾がある。学生は情報収集のためだけに訪床したときよりも、清潔援助（24名）やバイタルサイン測定（10名）に訪床した看護場面を抽出し記述していた。清潔援助では、一定時間患者と向き合い、患者の思いを聞き、タッチングを交えながらコミュニケーションを図り、患者の反応を観察し学びを深めていると考えられた。

実習で体験した看護場面は、清潔援助とバイタルサイン測定と捉えていることが多く、教育指導の場面は1名のみの記載であるこ

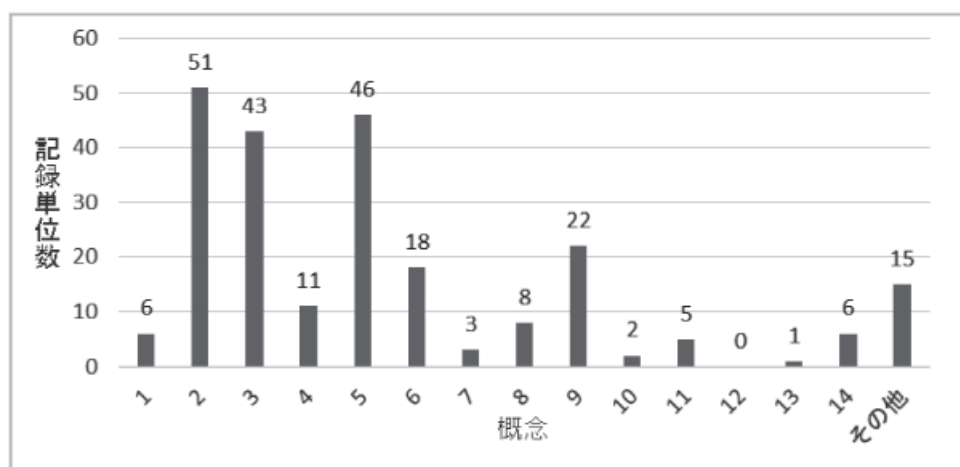


図1 A 大学学生のレポートにみる「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動14概念」に分類した結果 n = 237

6.2. 自己と患者との相互行為における学生の行動の特徴

6.2.1. 記録単位数

収集されたデータから237記録単位の学生行動が示された。記述の最も多かったのは第2概念(51記録単位)、次いで第5概念(46記録単位)、第3概念(43記録単位)、第9概念(22記録単位)であった。平成X年度『基礎看護学実習Ⅱ』履修学生は、情報収集による対象理解、技術提供の個別化、技術提供・技術提供中断、指導者演示の模倣による技術提供、に関する行動を自己と患者との相互行為として多く取り上げていた。

第1, 7, 10, 11, 12, 13, 14概念に関する記述は其々6記録単位以下であった。これらの概念は、許諾獲得により患者個人空間に侵入する、技術提供円滑化に向けて協力獲得する、反復学習による技術提供迅速化の行動・技術提供迅速化に向けた原則からの逸脱、患者要求への応諾・棄却、失敗反復による患者からの疑念容認、患者の行動の變化解釈による関係悪化の察知、患者への心情開示と時間共有、などの行動概念である。平成X年度『基礎看護学実習Ⅱ』履修学生は、これらの行動を自己と患者との相互行為として取り上げている記述は少数であることが明らかになった。

自己と患者との相互行為の振り返りレポートを内容分析した結果、「情報収集による対象理解、技術提供の個別化、技術提供・技術提供中断、指導者演示の模倣による技術提供」に関して数多くの学生が注目し、伝えることができていた。内容分析はコミュニケーションの明示的内容の客観的、体系的かつ数量的記述のための調査技法である⁶⁾。そのため、記録単位数が少ないことは、学生が表現できていない、伝えることができていないことを意味するが、重要と捉えた学生が少ないかどうかは明らかになっていない。

舟島²⁾は、看護学実習が学生にとってき

わめて複雑な授業であると述べているように、A大学においても実習で生じる現象は複雑であり、記録内容は多岐にわたっていた。そのような複雑な現象を学生が表現できず、記述単位数が少ないとしても、表現できていない部分に重要な概念が存在する可能性がある。本研究ではまず、平成X年度『基礎看護学実習Ⅱ』履修学生の行動を先行研究で明らかにされている14の概念に照合することで、教員は看護学実習における学生の複雑な行動概念の理解深化につなげることができた。

6.2.2. 同一性拡散につながる可能性のある行動

第5概念：「学習資源活用による技術提供と活用不可による技術提供中断」、第6概念：「技術提供不適切さの修正と修正不可による技術提供中断・強行」第7概念：「技術提供円滑化に向けた協力獲得と未獲得による技術提供不可」に着目すると、これらの行動は、青年期にある学生の、同一性拡散に結び付く可能性のある行動の特徴といえる。青年期には誰もが「私らしいとは何か」と自己への問いを持つ。そのような時期に、自分の表現に対する他人の反応や態度を知ることによって、はじめて気付いていない自分自身を知ることになる¹⁰⁾。「シャワーのお湯を普段私が設定する温度にした。患者さんは“ちょっと熱いかな。”と不快感を与えてしまった。今回の足浴では患者さんに温度、圧力、痒みなど聞きながら行った。」に示されているように、学生は既習の学習資源を活用することなく自分の好みの湯温を設定する、患者は“ちょっと熱い”という反応を示す、学生はその反応を受け取り、不快感を与えてしまったと気付く、次の援助では不適切さを修正した行動に変化する様子が記述されている。このような状況において「私は看護師に向いていないのだろうか。」「私のなりたい仕事は

看護師ではない。」といった、同一性拡散につながる可能性のある行動の特徴が明らかになった。

6.2.3. インシデント・アクシデントにつながる可能性のある行動

概念10:「反復学習による技術提供迅速化と技術提供迅速化に向けた原則からの逸脱」
概念11:「クライアント要求への応諾と棄却」
概念6:「技術提供不適切さの修正と修正不可による技術提供中断・強行」に着目すると、これらの行動はインシデント・アクシデントにつながる可能性のある行動である。学生の記述には「次第に経験を積むにつれ測定がスムーズになった。」に示されているように、学生は反復学習により技術提供が迅速化している。

A大学は静岡県内在住の学生が多く地域に根ざした大学である。静岡県の地域性に注目すると、平成28年度県政世論調査⁸⁾では、行政機関への意見や要望が「ある」人41.6%のうち、県に「伝えた」人は18.6%であった。また「伝えなかった」人のうち、伝えなかった理由は「伝えても無駄だと思ったから」が66.8%と最も多かった。これは行政への意見に関する調査であるため、看護系大学生にも同じ結果が表れるとは言いきれないが、静岡県の地域性として、意見を伝えずに見過ごす傾向があるといえる。医療の場に置いて不適切さを修正せず見過ごすことはインシデント・アクシデントにつながる可能性がある。

また、大学生を対象にした学習生活実態調査報告書2016年⁹⁾によると、「友達と話が合わないと不安を感じる」と回答した大学生は2012年42.0%から2016年56.9%と4年前より14.9ポイント増加している。この調査結果からも、現代の大学生は自分の意見が他者と異なることに対して不安がある者が増加していると考えられた。

看護学実習において、学生は同じ技術を繰り返し提供することにより、迅速に技術提供ができるようになる。一方、「Aさんは“お風呂に入りたい”とおっしゃったので急遽実施した。」と示されるように、迅速な技術提供を意図しすぎることによって物品を確認せずに実施したり、原則と異なる方法で実施し、インシデント・アクシデントにつながる可能性がある。当該の場面は、「クライアント要求への応諾」の行動である。この概念が示すように、本研究においても学生は患者の要求をとっさに応諾する行動があることが明らかになった。教員はこれら行動の特徴と地域性、大学生の傾向を理解したうえで、看護学実習における学生行動に注意を払う必要性が示唆された。

6.2.4 同一性の確立につながる可能性のある行動

237記録単位の学生行動の中に、「嬉しかった」「よかった」「〇〇という言葉をもたらした」「やりがいを感じた」「モチベーションへつなげた」「こんな看護師になりたい」「看護師になると決めた」と肯定的な表現で記述されている15記録単位が示された。これらの記録単位は「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動14概念」に照合を試みたが当てはまる概念が見当たらず、「その他」と示した。

記述内容は2つの傾向に分けられていた。1つは学生の行動により患者が喜んでくれた、患者の回復を観察できたから嬉しい、とした感謝の反応を受けた場面の記述が8記録単位であった。他の7記録単位は「手をつけてないおかずを指差して“苺のゼリーですよ。苺は好きですか”と尋ねた。“苺は好きよ。”と言い食べてくれた。食べてくれたときはとても嬉しかった。見ているだけでは何も進まないのだと感じた。」と示されているように、モチベーションの向上につながっ

た相互行為場面として記述されている。エリクソン¹⁰⁾は青年期における発達課題について、「私は何か」「私は何になりたいのか」といった自己への問いがあり、その答えを見出せず「自己同一性の確立」に失敗すると自己喪失状態となり「同一性拡散」と言われる精神的危機状態に陥ると述べている。この場面において学生は、最初は患者に声を掛けることなく食事の見守りをしている。患者の反応はゼリーに手をつけずに食事を終了しようとする、学生はその行動を見て声を掛ける、患者は学生の声聞き取り、手を動かしゼリーを食べる。学生はとても嬉しかった、とレポート記述によって振り返っている。このような相互行為によって学生は「自分」を形成し自分の果たすべき役割を果たしひとつひとつ自己同一性を確立していくと考えられる。「その他」に抽出された15記録単位はいずれも自己同一性の確立につながる行動であるといえる。

本研究の期待される成果の一つは、教員が実習中の学生行動の特徴を理解する際の一助とすることである。また、実習前に学生－患者間の相互行為場面の知識を持ち、準備を整えることができれば学生の不安の軽減やインシデント・アクシデントを未然に防ぐ行動につながる可能性がある。

7. 今後の課題

本研究では内容分析法に基づき分析した。この方法は「学生がどのように記述・表現・伝えられているか」が明らかになる。しかし表現できていない学生の意図や患者側の影響ならびに効果を明らかにしたことにはならない。また、A大学における平成X年度の学生53名のデータに限定されている。これらの点について本研究の限界といえる。今後、他学年にも対象を広げ、継続的に実習支援の内容や方法について検討していく必要がある。

8. 結論

『基礎看護学実習Ⅱ』実習終了後に提出された課題レポート「看護場面における自己と患者との相互作用」の内容分析により以下のことが明らかになった。

- 1) 相互行為があったとする看護場面の上位は、清潔援助(24名:46.1%)とバイタルサイン測定(10名:19.2%)であった。
- 2) 「看護学実習においてクライアントと相互行為を展開する学生の行動14概念」に照合した結果、「情報収集による対象理解と理解深化に向けた情報収集反復」「学習資源活用による技術提供と活用付加による技術提供中断」「対象理解深化に伴う技術提供の個別化とクライアントへの共感」「指導者演示の模倣による技術提供と指導者技術提供補助に向けた役割の負担」に関する行動を自己と患者との相互行為として多く取り上げていた。
- 3) 相互行為における学生の行動の特徴は「同一性拡散につながる可能性のある行動」「インシデント・アクシデントにつながる可能性のある行動」であった。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書。
www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf, 平成19年4月16日, 最終閲覧日2018/9/3
- 2) 舟島なをみ：看護教育学研究 発見・創造・証明の過程。第2版第1刷, 10～16, 201～230, 医学書院, 東京, 2010
- 3) 阿部ケエ子, 舟島なをみ, 山下暢子：看護学実習における学生とクライアントの相

互作用に関する研究－学生の行動に焦点を当てて－. 看護教育学研究, 18-1: 21～34, 2009

- 4) Patricia Benner, Molly Sutphen, Victoria Leonard 他: ベナー ナースを育てる. 第1版第1刷, 267～268, 医学書院, 東京, 2011
- 5) 和田 功, 南 裕子, 小峰光博: 看護大辞典. 第1版第1刷, 医学書院, 東京, 2002
- 6) 有馬明恵: 内容分析の方法. 初版第6刷, ナカニシヤ出版, 京都, 2017
- 7) 深井喜代子, 前田ひとみ: 基礎看護学テキスト. 改訂第2版, 216, 南江堂, 東京, 2015
- 8) 平成28年度県政世論調査, 静岡県知事公室広聴広報課県民のこえ班, 54～56, 2016
- 9) ベネッセ: 教育総合研究所ホームページ 高等教育研究室第3回大学生の学習生活実態調査報告書2016年, <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5169>, 最終閲覧日 2018/9/10
- 10) 高橋照子: 看護学原論. 改訂第2版, 74～75, 南江堂, 東京, 2016
- 11) 柴田武, 山田進: 類語大辞典. 第1刷, 講談社, 東京, 2002